

Needle workの流れと将来

山本篤子

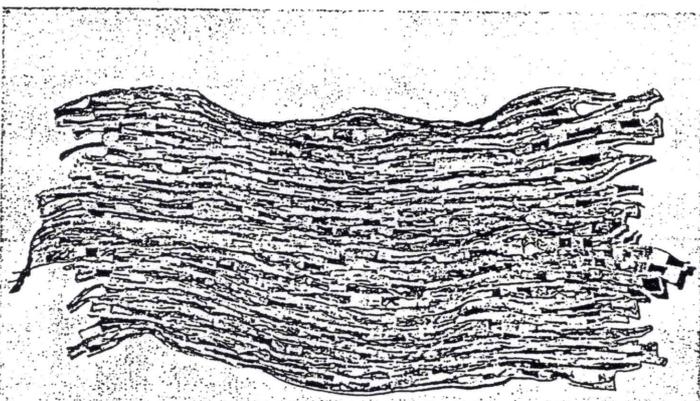
Needle work (以後N・Wと略します)の最も古くは、恐らく皮と皮を縫ぎ合わせたものだっただろう。詳しくは服装史を紐解かなければならないが、原初の衣は「紐衣」と言われるものであった。厳しい自然条件の中で、人類は身を守る為に肉を食した後の皮で身を包むようになり、骨製の針の発明によって皮を縫い合わせ衣服としたと考えられる。何をN・W・というか確固たる規定はない。N・Wには当然、裁縫も含まれる訳だが、民族衣裳をN・W・として見る場合、その縫製ではなく装飾としての例えは刺繍のみを取り上げるように、一般的には、針と糸を用いた装飾性のある手仕事、あるいはその技法を示している。歴史としては刺繍が古く、中国で紀元前千年頃から始められ西欧に伝えられたとされている。宗教との結びつきが深く、又、民族衣裳との関係も強い。支配者層を中心に芸術品、工芸品とよぶにふさわしいものにも高められ発展したが、十三世紀のイタリアの禁欲禁止令下で絹糸を使えなかった庶民が麻地に麻糸でぬいとりをし、より良い装飾効果を出す為に穴をあけ、カットワークやドロンワークへと発展させたように、又、我国に於いては、江戸時代、麻の着物の補強や保温防寒から生まれた刺し子やよぎんのように、又、英米のキルトやパッチワークのように、庶民から生まれた多くのものがあり、レースあみもの、アップリケ、

最近ではミシン刺繍等も含めN・W・と総称するようになった。それらには装飾性に走ることなく、実用性が共存している。現在、N・W・は伝統工芸のもの、民芸品のもの、あるいはまったくの趣味のものと同様であるが、本来的にはすべて生活に密着したところから生まれている。伝統工芸品や民芸品としてのN・W・は、経済性の追求、科学技術一辺倒という現代の時代背景から来る諸問題をかかえ、今後は、美術館や博物館で見ることが出来なくなるだろうと言われている。時間を越えた針運びから人間の生活にかかわりつけて生まれ育ったN・W・が、用の美を失ない、美術館や博物館のガラスケースという柙の中に入ってしまいう淋しい時代になって来た。人々がゆとりのある生活を取りもどす時、N・W・は生活の中で再び活力を取り返えすだろうが、あわただしい時間に追われる現代生活に於いて、生活に密着したN・W・の将来は暗い。そんな中で、生活色を出さないartとしてのN・W・の将来は明るく感じられる。創作による一点制作のものに限るという規定つきのN・W・のコンペティションが、出版社などの企画で行なわれ、技術よりその獨創性がかわれ始め、N・W・の将来に明るさを与えている。とてもartとしての作品レベルには達していないが、趣味としてのN・W・が伝統や型にはまったものではなく、創造性のあるものに向きつけられて

きていることは喜ばしい。良い作品が組織化されたところからのみ生まれるとは思われないが、現在日本にN・W・の組織立った大きな研究機関はなく、N・W・の実技としての美術短期大学が唯一あるのみである。そこでは主に、日本刺繍の基礎技術の修得と、その技法による創作作品がつくられている。しかし伝統の日本刺繍の技術修得という面から見ても、line artとしての作品という面から見ても、中途半端で、せっかく美術大学という恵まれた設備と組織がありながら、非常に残念な現状である。N・W・の場合、伝統のものとartとしての新しい創作のものは切り放して考えるべきだと私は思っている。artとcraftの作品の距離が縮まり、ややもす

メアリー・ホール

カーウ 1977



ると区別したい昨今だが、N・W・においては、すでに完成されたものがあり、それは工芸として守って行くべきものだと思う。工芸としての新しい発想による創作作品は技術を伴った厳しい修練と研鑽から生まれるだろうし、artとしてのN・W・の作品は、他のartの影響を受けながら、伝統に支えられることはあっても、伝統に縛られることなく、自由な発想と技術、方法から生まれるものだと考えている。

まだまだ数は少ないが、美術展でN・W・の作品を見かけるようになった。——最近、日本画、洋画、彫刻などという従来の区分がその作品の傾向から不可能になって来ている。日本画と洋画の区別が難しくなったという意味ではない。

この傾向は世界的で、絵画が立体化したり、彫刻が「彫る」「刻む」ではなく例えば、柔かい布を用いた造形作品を含むようになり又、二つ以上の技法が合わせて用いられて一つの作品がつくられたりして、技法による区分が難しくなっている。そこで従来の区分でなく平面のもの、立体のものというような区分がされはじめた。——N・W・が用を離れてartの作品として将来性があるとのべたが、すでに純粹芸術として認められている絵画や彫刻の作品にテキストスタイルのものが材料として用いられ始めたことが大きな助けとなつて、いままでもartの世界にその地位のなかったN・W・がartとして認められるチャンスをも得ている訳である。今後のN・W・のartとしての作品を大いに期待するものである。

(刺繍作家)

イギリスのニードルワーク展
↓十一月二十八日(日)まで。但し、月曜日は休館致します。